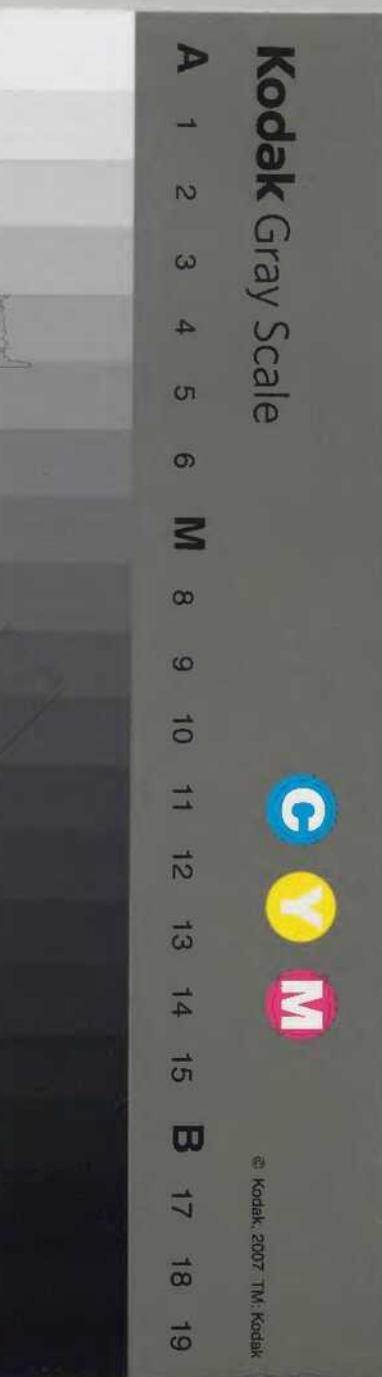


街談文々集要

一



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

文化元甲子
街談文々集要

豊亭大子櫻葉

友人與書を聞くやうとて文
物見るに思ひ
以て文もとへ仰
りて山へ初
文と文のちが文の文政の文
字あ度の時世廿二年精
思ふゆき真跡りかくす

明治十三年購求

國立圖書館藏

書は多公故文々集要と表題
其行きと格調平話と古とし文と
雅も以て思ひ出しあつた筆と云ひ只
官方の喜秋うづり替し昔のさかで今
が忙子の見むるを一席一話の役
である耶んりとふと翁豊茶聖雙
種劫うり筆を拂ひ乍り手

萬延元庚申 楢月上旬

九例

僕寛政土未比母モ生ミ得今六十ニ年乃星
書と行ゆ文化元甲子ノシハ平家モ知事ト
見レトキテ年々と云ひ有リ
此書文化元甲子歿ノ日十四也近古テ年文政元
寅とシ同十二七年三至度合年廿有二年の
間江都及近在を西支那臺灣至近聞トと傳
角船ハ起頭記載場ハ年代記或ハ年々の詳別記讀
手ノ海引多面かの見せ相手準
都下小高名の人々貴賤と稱く或は年長と位し故不
かの書、ゆづり其を少く云あじしなぐれ
皆山海の異変或い是る歎の如重忌の如ヒサカ

経易と向ふる事す
 一暮晴りより狂歌函首おこし附ある事一卷
 一千きつニツミ類の字をかくしきの年大奇と号ひる
 一は書と虚実と毎記すお遠翁年うるば生質の経互り子
 実從知れり一十種と云ひ自撰の事とて所書所行

以上

引用書目録

一詰一言 半日閑詰 玉川砂利 金曾木 街談錄
 張文庫 葦浦集 万年萬葉 定所難解袖舟隨筆
 朝風翁筆記 ありとみ草紙 我に奉表 経家の走筆
 叢書 故多 月堂夜詰

- 文化元甲子
- | | | | | |
|-----|--------------------------|--------------------|-----|--------|
| 方一 | 甲子改元記 | <small>秀修集</small> | 方二 | 叶福助起原 |
| 方三 | 太郎社群參 | | 方四 | 忠義之壯子 |
| 方五 | 孝子御褒美 | | 方六 | 金談聞慶心 |
| 方七 | 狩端 <small>司馬</small> 之跡忽 | <small>神名</small> | 方八 | 揚尾驛仇討 |
| 方九 | 狂女粧紅粉 | | 方十 | 班犬入城内 |
| 方土 | 羽丹大地震 | | 方十一 | 倡妓泉女墳 |
| 方十三 | 還御嚴雷雨 | | 方十四 | 怪異二箇詰 |
| 方十五 | 伊丹泉出堀 | | 方十六 | 壽支二十四度 |
| 方十七 | 兩國川情死 | | 方十八 | 太閤記廢板 |
| 方十九 | 獻龍沙河魚 | | 方二十 | 當山脚入峯 |

庚午
壬戌
壬戌
難波十奇談

於松島故村

文化元
甲子
墨曆



引義
従人白画
よきがや出處入
門の立ちかず
そもまことの
太宰治著

甲子改元記

一萬年以甲子より一元中後ノ御令を定め一
えりとくとくはのまにテナリ列候諸士想出仕
於營中年号改元之旨土井大次郎承傳也達セラる

甲子改元記

文化

周易曰觀乎天文以察時變觀乎人文而化成

天下

後漢書曰宣文敬以章其化立武備以成其成

嘉德

左氏傳曰上下皆有嘉德而無異心

嘉政

唐名曰嘉其義政題贊於聽車

萬寶

文迁曰萬乎大平萬室以文化

嘉永

宋名曰思皇享多祐嘉樂永無央

文政

尚名曰孔傳曰舞寮天庭七政

萬德

文迁曰萬邦昭和施德百廢而肅慎

年号字七號之中文化為德可矣

主上仙洞恩石之志為相臣等勸同有為而無名號多是奉
奏而追文化之號故云御成之沙汰此乃我朝風氣不無耳
亦使身不為用也而號之中國東也古之公可有為法定之

冊旨國東宜事入山革

内裏

度檣前大納言

若國代

子經承中納言

改元序故之事先例通云山下野守

文化元甲子大小

甲曆班周典寅賓應夏正六花呈國瑞十雨試
王耕桂國三層亞麗蓮峰八采霜鬚君莫臘酒恩
春情

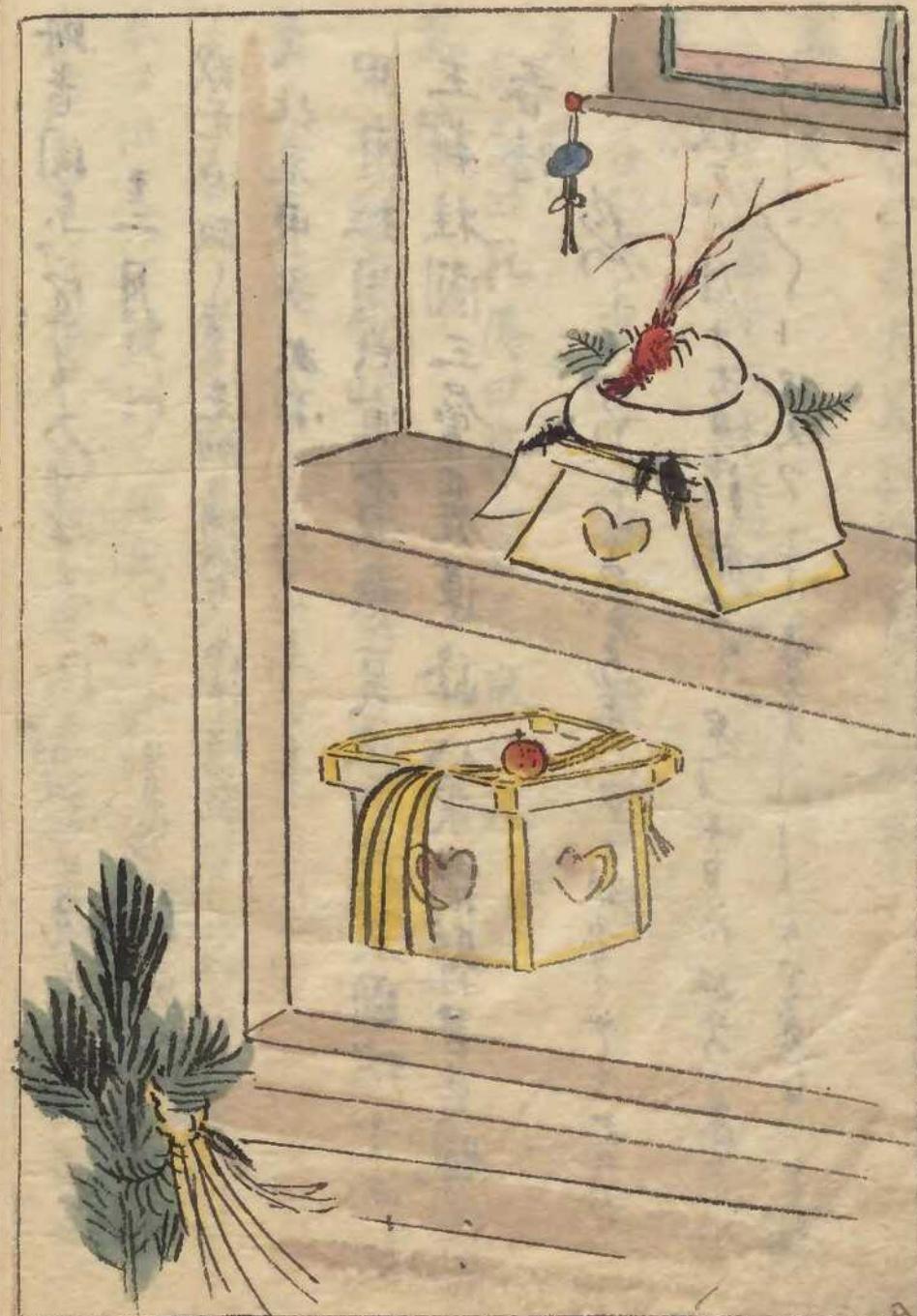
移りうれぢよがちをふ 但立きうきう太の月

右改元二月十七日御觸有是日十日後以是年冬月
ナシトは又マニ貴年ノノリ一ノアミリノ捕



右參議不覺乞弟取後班而建不斗荷年号
元明之政元至之者增肉今方被羽革之革之又乞古風之教有
以入之賣步所服能之經綸不以
公儀仕方立庭上於中退故之終

神田御店所抄肉
今原家店
文秀



市水 叶福助起原

一
ある事叶福助もし頭大きく脊椎ぐくと下をも
うるを人取られ、腰あくよしゆくはりを抜馬に控がく
手外しきのめり准へ被り身大、温酒を渡す
折半の如く痛坐させ多所移動ますとくにキテ
入浴す成道す坐の痛風とは立上りて手根元ありと
手出せで切らす坐起更衣席の心も直せざる列立
坐しすまうもううけるときの座敷す

のまつり叶福助

叶福助傳ト小本出版

福助傳

一
ある人のソレに教の士行來みやこ立高のおり福介とい
ふ小老主人のむせと神かのうやうく
昇進立しとや主人も浦志と國一福介あきのち
浦志ある上偶つてその福助の形を製させます
そく配あけきくへども替しぬままだまくもむだ
あれハ廢の星子尚く若ひとけするゆもからて良
服小眼子う波、あいど年老の心もおがつじもくま
軒の美名をうむ、あいど人ふてはき到處をかた
あく経年にして、久すとすと衆人を故て福池
とするをしゆう馬年秋、「堀森の舟船小三

平自慢のふねののん陽物のよにたうの客人天明神

のけ仗者あらわや

あをけなすすみ

桂や涼れ乃

ふくへうち

あうき
めぞく

青ゑんすか連

ちゑ立川族防櫻馬馬弓の初仲の賀うす因に書く

西文 流行傳

おもあく浮傳年とねのま
せぬも可ゆるあくやく生全の
去色つきはれも除やうて
いはれの風を吹形
おしゃれ身きのよるあらだ
移解般使事も立川汝
りせやまきせま日の秋
きよ立をねりしら
火事ひはゆのをあてて身を守て
地而そらもあらど
身のオナヌ絵の色な
辻彦引もうなせり
せの中をすねむりをゆく
ちぢれあ段



鶴文

叶福助親類書

福神組西官夷三郎支配

本國深草
生國今戸

叶福助

洋領面補福木萬公主延方往所作

一
是沙門孫御代弘義福壽延命小判改少從事和氣
從翁至任多乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞乞
金銀茶錢波山五味乳通隱居り修業所於
病參之間七福神少列座出世大聖天主坐り修業事
御全參白蓮寺り修業當時金貸付

於多般事

妻

豊芥根

叶福助の人生の起り到京町御前故橘太文字屋

市中清初の衣冠見せり追付かへ京町御丁目移
大姫家とあつて叶先祖即ち高僧り一月の食糀葉の物
も万疊以上を買ひ度るの内に南浦多賀村也も勢ぞ
よしすれど此の恭西口、福助と化してから京都大通
やの大通ちやを多く市中をと歩きて千浦猪子郎と
ヨリハナヒト大まかる頭と清めきとを尋ね、踊り手引り一曲唱
ひうち評判あかり大文字屋へまわる大聖堂せり 此處を移りて之を 壱又開店と云ひて
名聲りゆき形ひを爲す利益の如く財布を被ふる事無
又上井山下野郡大字新田町色のよろと爲せ土に叶福助と
足せぬ御多う是をもむけ向なはれ白を晒すと利多とひ

相良侯ハ松本を以て之を御所の如きとせん人等もすらぶ叶
祐助フナニシの姓也。モテテ千廢主とあ

方三 太郎初群參

西二月上旬より漁季到來立花屋の下宿が少難有る
中島橋の太郎神より馬ありて一月の舟の群集駆逐船の
川毛太郎等一革貝の物を運びて之を取引する事
父や祖母等の後^{子孫}に及ぶ者も居り

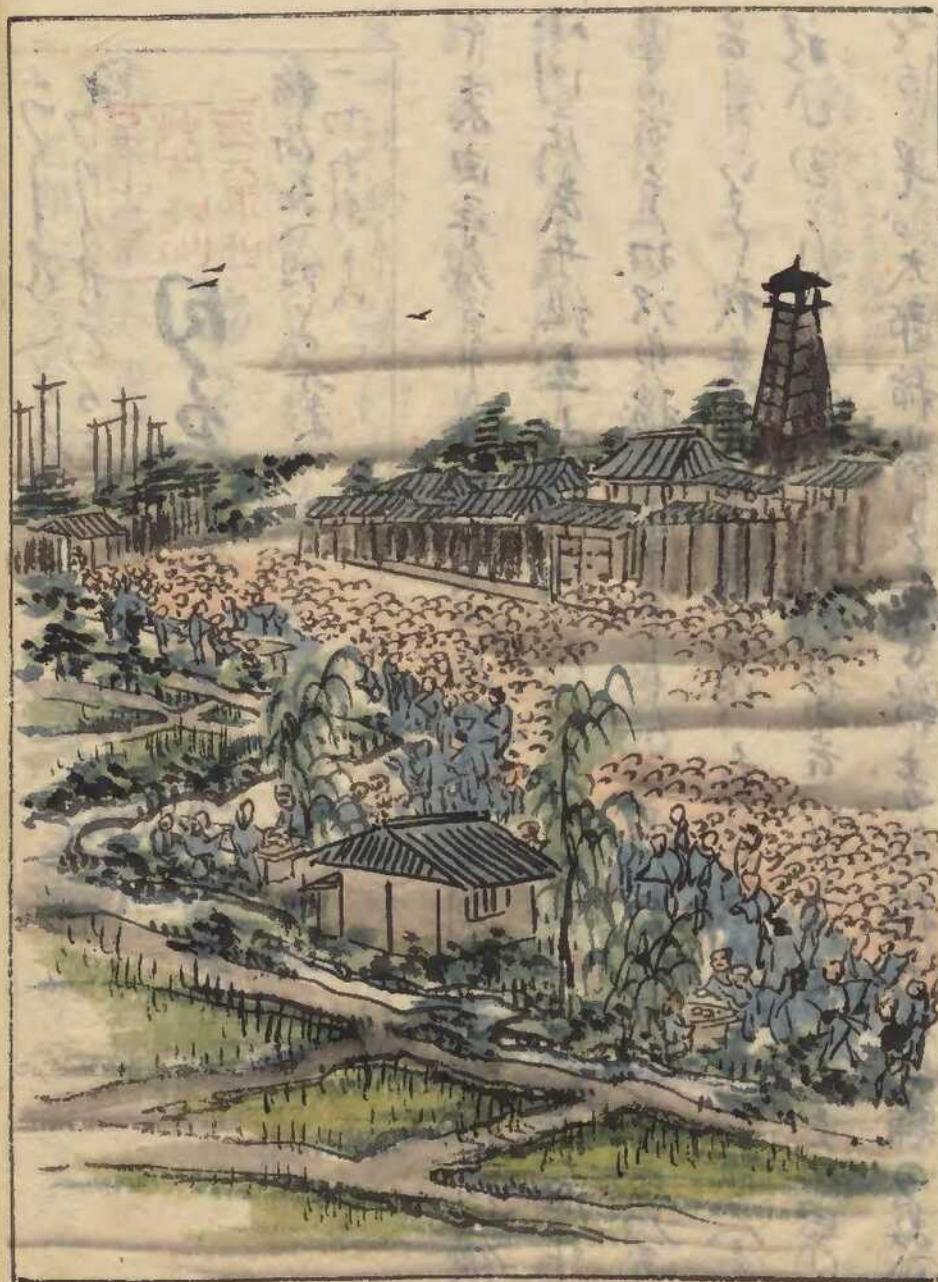
尋事中人を訪学する所乃
涉き於久松山中也

耽奇漫錄 山崎義成翁著述

稿本何社約之
一切未到

今來由尋内事平立花庵清主所遊過園大和郡折門領
小川庄成井組立山村下御福住中一寺庭然稽古之仲ト
事宗子初次帝相高上寺マシム或取村中の氣々夢ア
告メソシテ秋子を取ト藏マシテ寝アシテ陽居シぬまア皆人乞
被ひ毛豆シト御子平家無カ告ヤシ久里人吉支の累
シ高是が太郎稻荷とモ吉称赤飯揚豆腐舖の如ク

思ひてお詫びを請ひて時社領として十五石國
主を経てといつて母事實がどうで正治の以後某の守
護大友は市經宗の娘み因恵而生れ新と号す其小瀬会
う三浦蓋深ゆゑて非とむらる源二位松井のつ龍光
の事一子りゆきむじ加名と冠者太郎友と申す（左事ト
右事）
千後鎮西のまへりて豊後の勅令しむひ掃部頭近能
養ひて近隣盤屋とある是立花彦清は先祖あり
是より被相馬と號す（福）一社と建利根太郎の產出
と云ふ太郎冠者相馬太郎と勅請しゆくらせ第立元
家代とあらず限らず、威の軍利ゆくと社領十五石高寄
附りて天正三年の事か今神主同姓氏と



小社あれとも主を前仰あまく猪人情にう教を近世滅多の
心浦落多立死度落多御も山代うりは
ナシ

至も活一京社の猪利定居不人を石子すあす一妙義の
うち平穴ゆく多居五相直也もトヤムアサヒキニ申
猪利生ゆきをさめく囁がゆと安東モテ又向
へ癒がよし月から披摩が耶とゆく勝得すくおひまも真
事すも安享和三まく一席修羅御一あまもとけじらも云
少徳玉賀と御の猪口くもひすうきもとどものもり共
快活をつき付のらまうと大年猪名の利生とおじ御口を
いととあるべ一右太郎猪荷智昌年廿上様や一ね
白狼傳 中車一冊 大師猪之猪利記 日暮はわ
ちゆく喰 おとソギ一双六 けを絶えなし是モ

忠義之壯子

一文化元甲子三月廿日申午市方仕はうす寄物もあらん所
御奉けり召出門座衣裏とく一白銀一枚り重假名
世よナニ西用を有ムリ一猪口幸とひ柳ノ木ノ
御まが様ト 以御すとにまうた段の御ほと上梓
大至の名を知るへが方膏原とこそは左通

忠心職人傳

嘉慶丙子年四月

四十卯辰

啟元 楊町二角 山本屋小八

右仁宗ヘア後毛高飾於市内村百姓要助伴モ十才の武
七年以予年と申西主入半十神方ト年季才ノ子をもひ
お縁末十而上帰是將金義ともに人をも猪細工廢せにて

香ノリ氣に車のあら車にて中全氣の病死せりれど
五十日と一ヶ月餘後退院し取戻もせず承事ある事有
る、因爲に及け候妻の生れニテモリこちんとひければ
はく（キルモ）考方も職方もおらず移り方ある事
たゞまふか老んじておもづかぬ一人の件を乞いんも
まづきやう形く依く業の立て引廻西ちそ方もお見因藏
の若年へをもる政令にはとや外もよびそくに六十才
から、ハリ重ねの年慶深にて一あるのちおもむき居けれど
食の店の者どもあ焉無ひ五個とおつゆに仕合ひやける
ハ私主人おとせお主おとせおとせおとせおとせおとせ
おとせおとせおとせおとせおとせおとせおとせおとせ
おとせおとせおとせおとせおとせおとせおとせおとせ



心庵ハ家主也。而主人も深宵に止むる所を是處主人の居
いり玉あがま御用と申す事無く人とも加年六月より事起
の者ありとくたの様子とま十日御川へ半十日もにて
ひざきかみをかねせ四年二月ある年妻の直前と
もあり引廻りを以てたる事うなづかし取引の取扱
方とも本擲細節お持てて村上が高瀬御川を切
年の年々より賣子とりて食料を買との又、達年
きてあの役落系ほど捨て直角ひつて薪と食事の擲の
も供ひ、色頃かは細までて千外万湯の附生体今抱せ
一處また十席へは向地不經列のよもじ向地の身筋を
立れ難きことに多くゆるべにとても主人の心平疊ひ望
成年より中津表トお廟ー本擲としとて手せりふ
にて弔事の手がた富多うらへ坐し猪口働き仕事
志小網あわからぬ入る主人金持と生坐せ有り、九月
ひととし翌日油井形にかせき令義が三日かの足程、喜提
石墓ありとて致飯ありゆ、主人金持のとて歿の主人
あ人の内のみ諸侯と地所くわかも衣冠杖立ち和室も而集、
彼是と次第少々抱き合ひ主人の厚そよびのりをみて
まへそ襯さくねる事へ是故モ表店やへ書しめれ見事
离山もひすゑ裏店へ引移りあは店は笑も山あへ付る
まきももくらめむるははとおぼえひき事候を
はるか昔よりり々裏店へ引廻りを行ふ事は不自由
ゆまゆまと猪口猪口おはれ御川へまよへる、因ゆゆる
藏をす終りを廻神す年猪木の前モ勿論猪頭
休日カズモ休事なく衣類もあらず一途余職公とせ却

こそ奇物も四十歳もあらずとて、而六十才才か房をよ
むよしやくらえ持て老年あるとよきとよも全然十年
初年より老るゆゑ也。左のとて、其處
御奉行所様へお處へあり、奇物うち多有あ子の二角せら
にえども、とて、のとて、のとて、のとて、のとて、のとて、
白銀立役下へおうきをあ
れとて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、

如年より主へ、祇もと盡り、事天を通じ、おも
公儀の政許ふるをもれ西慶義賜り、事天通じ、おも
いづるや、おひと市すら四書立役考役の勅を宣詔
教章を教も掌もさげと、引ま人件などそもすと
モ共、ひと得もとめうと、御、事天通じ、おも

方上 恭子御褒義

牧野信兼

小石川傳院方

根岸景家

高木 信清

此者儀子七十より、あれ、壽も平日あれとて、しかばんと
身と向もあ無、そち死をのれ色以て不如きあれ、ぬれ、ぬれ、不
従何事か自己を棄て、獨身而死を處焉と事古美、月う
老病か、腰骨痛か臥在け老童取材原介抱内み筆
哉母に言ふは、餘地も好められ、自然にましむせざる、あ度
かの世活生、行居、輕易の難役任、あとはあつて、抱きまつたが
ひ者も側近、介抱御、且又、喜きも、母方子幸早、お成
身とも引を、並是丈寧、御、御褒義、御褒義、御褒義



白銀三枚より多羅子聚赤アシ

あ月引

右、左、右の母事等
がま代 沢元年

壯者後悔八卷の卷をもつて老衰挾持おとす一日二茶
立合ひにけ者生涯之内より多羅子うるまね

右通中給後親乞頃我休

文化元年子立トサク

左、右の母事等
がま代 沢元年

ああハミムキナカヌを至し此一條の母親の暮暮の母
をもじ取給多幸年久と其の世は達し如かのまことうそ
生後也神佛の心加護アモ近キ
上ト崇徳院天通の年より年少之ニモ
も年所也づき年少之

六 金談聞變心

一
此義兵坂色の湯船の事も少く納は候もあめ叶者下所近
初年うる年季を云ふ氣所處生序体義あるかと主人
の乳やもひうる年季を以てお酒とすと有りきの色を内
走坂を賣い酒食居所地をと後家入へる所は通し老者
お徳城處親方西や宣する事とおどめりひき自分等
入是處年うれと申奉灰親方々金季三十あせびお酒入
支川然處草外の處居地而もお質入傍人もお初えれ
従うる事従多き也(菊池)親方石井和也と相たる
年じと申まの數保ひとも親友(西月)ニニ年費れぬだ
好むと取及身古事記生辯色白鳥老童と申す故金子ふぞ
是事新と是も平ちあらゆる金錢の事も毫末でゆかく平年
難徳不時とうしめう内事多きやゆそね金もと出でては山
やまの小川町浅野鐵於ねと申す方より狀を承け申すと只持
少居間様の下ふまたお石の唐松千人垣立木がさき金事で
麻うる金子と聞けれどまへ浦ゆき身お邊事と申す物
義家事ありと申すうりまこと金子行くあめ仰
取部と申すとあ波波や赤面など申せらひよくまのび入船の
下ふ通ひ也坂立てぬ處ソモ石の持てん子友連奥をも
とそねへせゆりを申浦に達入ゆき階子を下へ御め事成
モード一挺持引の陸舟の申す人間もひらざるやふ事成
れ相即く既登鑿(うちか)越利木川蓋れやづくと骨引らるてゆく

か風の手
石庭令入
空城



勤もせや時刻を極め候ひ候もあひ居を承り也。す
れどニまゝ内山武相室のすいを安好拂ら西院中大掃
除の事は思ひざる所もござり候。是を知ゆればとて
又おもに盗賊ののれ様子あまへ色々考味候。若く内居方と下
やと改名すや而姫君の事もいぢむる事で蓋を内殿
子殿室もあらず又内院もあつても御年をもあらずと書き
申候事ある裏より精勤も立事あり。御用引かし運のそ
ぞくを取成事。但くとも人ちあ勞ひ坐し少頃の間處を起す
人共やお召めあり。今取ひ落すもよし入る處は余程と
贅財有濟と公房の内書の若水中の食事すらもゆる事
財をとしゆの通す井戸引出し又手すりもとて盗賊ト見た
こそうれ大智かく取うてもとて叶えぢと連ゆ一瞬と紫
鵝く走る事あり。各刀を接切りせば彼をも見ゆるを
乳がいねくよく竊所シテ、逢年も怪氣内山の話かく
廢治の出来事の如後世家も其處を連ひ居る事
は其儀より諸向と移寄。少尊きとて敵人の手放す連ひ居る事
内川太守致及ぶ止と捕ひて候。此後未だ跡跡アリテ
此考す初年の時から実脚小年季を公文勅主へ
褒美令追加の力をほす處。又内一因房、久配
一時の徒役風ち悪心を犯す。一から大罪也。簽り
賜じ大切の體を野外に控らすやうあるべき事か。又
前二ヶ年とて采を聞て善報惡報の事多々如が傳題

芦セ 狩獵之跡忽

一文化元甲子二月八日庚午狩御門日永井朝貢馬
一方太田志摩也近飯源主水レ過りて猪を寛焉立節
御門村因波伊東長吉宿御自御渡河免シ 佐治左通
小内三月廿九日年立鹿也を及於宅は今御門村因
使無字名の兵越立合

御門村 永井朝貢
名代 年賀経物

一方浅八也舟席持と近飯源主水レ鷺兔也近遇主中
あり一弓の御そとをアシテおも清高方シカ化然たる事無
能く御渡御免寄合シ 佐治左通

ナシニ

大内の車忽も永井鼻の下席も因生も声乞キタマツく
旅遠子席と因生の身ハ勤負シテ筋不永井たんう
門役の車忽とほえまけゆきを知るに葉の年上ヒタチ也
路え乃因生の人のマラハ加つてく房うなづね松木



日付と月日を記すの仕事の致事のことで、伊東長吉は
庶民身家をもつて、せせらべ、紋のあひの切口
物をせし。庶民もかくちのもの足所をきくに依頼

一 司馬甘佛名

文化元甲子二月十九日正八时司馬甘文秀云
贈司馬全君門
司馬母文秀名
二母相続姓家

佛名 對雲ア喜樂山信士 俗名大体寛十郎

前書寫る。御宿ニシテ又自筆の座書あり。而して之門へ其正書
せざる處也。ハ太中州人文化二年九月來、中山府の御写。芝熟の書之通称大倉
氏。二年中句甘文秀去の後亦と自筆手通承。及爲之書。人
海那義雄 文治四年三月草々山書支ノア。之を藏むる人、御承經書。是
れ。二年五月文行ノア。先達ハモト高

一 楊尾驛仇討

一 文化元甲子三月十三日夜七時中山道楊尾宿

付手

或云彦根郡立井村

田多門飯古川

富士郡

敵

或云門故立井村由生

子代

右或云楊尾宿旅館を渡る處宅也。付手ノア此所ナ
内伏後源國志兄弟文配所ナ。又立井見立庵居テア
考。萬和二年半以降官住立井。而立井川越太源也
彰田。やく林亭。えど。さう。あり

詩

卢九
仙岱狂女

狂女莊紅粉



物を以ての如き何事に往來せんか世人に仕事
女と称を賜まつたまへ凡二十余年未嘗色衰せ一囊
貰ひぬ屢々着用して財物を失ひ候ふが衣裳
を敬重せし朝の拂拭アタフ病氣もすれど或



時ハ御沙羅と白いアヒトの小鍋を以て車中
暑さ流しまと着寒く御沙羅と重ね荒年も
飴と水旱の方ちと云ふ事あらず所住きしむ
河と庄共に隨處とすれま婦の家とす物
成らむと田の手と曾くうけぞ妻女の
立あすけ神御沙羅は蘭麝とすと
脂粉と蜜と中房の杓子糠アヒトの使ありうれ
はなが外平あく形ちぬくそくの鏡相
て茶計とモテ衣裳をつる鳴年摩姑仙女清一
とも似てされんこと毛女利うれいも源
し経とかる小町とよせの深井は三井山中
村何を縫うやうを食器とあらわすてあるゆゆ

一妻此中と謂度の端すきとて食事と器とあらず
夫いと辛と涙と於危急と同一路徳うすく伏の
かく本のと歎きとぞれに在應まつ不日とかく而
幸れく市中と花つととまく田舎くわく是地仙と
ゆくもひきの石鳥居あるて墨と寫り發ゆくとす

容嬌仙公女 壽數且無知

敬忠

疑自蓬萊到紅顏似昔時

壽生

私と魚とうきともあらぬことすま

壽生

相管力笄花作瓶妻年來徳繁松香
ち知姫玩人間否但見人間愛姫狂喜平仲

狂女とも思へ柳の風静

清雅

林の木をもてや仙女の力アシノカズなり。萬興
娘のかいり櫻子即石牛イシブタとす。筆の文書

義のノハナ

龍仙翁狂女桂路傳

東元

雲中帶衣裳華作等 年中陽冰路頭臨
是非膏藥德平類 韋尔仙産狂女心
妹の年ノハナわふに女アマ娘のよ
水仙や辛ハリトハリモ花ハナ乃影
折ハサウ抑ハサウ月のハナとハナ

貢稿

貢賀

本金

文十 班大入城内

一文化元甲子三月十九日ヒマツ毛毛毛毛毛アマミのアマミ大
手アマツ毛アマツ近アマツ門アマツのアマツ是アマツとアマツ教アマツさんとアマツ聖アマツ一アマツ上
大聖アマツのアマツ是アマツ於アマツ齒アマツ御アマツ一アマツ下アマツ多アマツ格アマツ中アマツ也アマツ於アマツ中アマツ在
山門アマツのアマツ序アマツ於アマツ齒アマツ御アマツ一アマツ下アマツ多アマツ行アマツ者アマツ於アマツ齒アマツ院アマツ事アマツ有アマツ于アマツ度アマツ間アマツ花アマツのアマツ庭アマツ於アマツ聖アマツ事アマツ有アマツ於アマツ小アマツ會アマツ
人アマツ大アマツ勢アマツ而アマツ連アマツれ探アマツ大アマツ河アマツ能アマツ草アマツ卷アマツのアマツ被アマツ目アマツ而アマツ寫アマツ修アマツ
血アマツ骨アマツ毛アマツ毛アマツ人アマツ足アマツ毛アマツ素アマツ孔アマツ達アマツ入アマツ事アマツ大アマツ海アマツ拔アマツ於
ウキアマツ毛アマツ毛アマツ人アマツ足アマツ毛アマツ身アマツ毛アマツ之アマツ家アマツ事アマツ之アマツ班
のアマツ而アマツ近アマツ石アマツ壇アマツとアマツ馬アマツ西アマツとアマツ東アマツとアマツ石アマツ壇アマツ上アマツ大
人アマツ多アマツ而アマツ近アマツ田アマツ船アマツ多アマツ退アマツ也アマツ而アマツ歸アマツ息アマツのアマツ石アマツ壇アマツ上アマツ大

大戴禮記



走りを一間飛ばさずと居合と進んでゐるが
不入り捕りでかまきりと形が引く罠の柄と水中半
押迎射で一矢射り放す事多し之は其の後

子大山

うすで大とびぬてもあまの詮きねおひとせ
あく掛かるとも様と夜の下ともあかんとや
病氣もあらほくうてへきくあひのうことをう
ありのぐ色あきけ葉巻やうあらぐ捕ヨギ
あらふをこそ近づけ申





中
立
羽丹大地震

一文化元甲子五月廿日二月四日由羽丹後大地震以後
移領分内相瓦店四面崩潰飽海崩山南下而移居
其地也震裂山石裂地泥多湧出地於或之多々也
有數處裂地有月被移而見

一馬糞場柵木也寫千处万所因爲震箇間平引出
一兵房坡饭玄廊下蓋前向震失門檣痛破泥壁牆也
痛坡西三丈八斗七五七間了裂泥水湧出土居方丈化之和
泥大屋土牆也共百間倒出爲数千引并切屋下
墜土牆場周而

一宿至參行大井一月七日付八據一給人家付少郎
一日痛家百姓亦可家付皆大井二口痛家是事也

寺 月 壱七日 一月痛
日廣院 七月 一社家
修鑿社 三月 一月痛
國廟社 二年祭 一日
一 祀是三百草部一月
一 死人 百辛人 一葬是百辛人

右山腰足内山中
酒井左近死人金方

母後主 九之 室上監物 三子母恩 桦平白左衛

出羽國

三万石 沖井左近母 あ音布
安五烹 寒井左近夫 も音布
八石石 沖井石見主 ハラム
毛衣 石井伊勢主 カロム
毛衣 石井伊勢主 カロム

方 十二 倡妓采女墳

一文化元甲子六月浅井ノ原邊池、竹篠采女碑建

采女塚

寛文の御朝志京庭、采女の遊女采女うどと年
のよかくもむらりうだす家のちがくにゆく
近づけまくはきのちうらひのやあれこ様に采
女うれす窓のよもよまでて自言せきる采女の
志を哀れむる歌家であるがゆく浅井ノ原邊池
捷走ふ身を沈めぬ時十一年十七歳アササキの
美人ありとせかくの私生少被そみて絶命で
名を失わくあくとおりのいはうる海の
あくどうこう波くちづけ

かのあきりを修理してとどく家女嫁とてあそふ
寛政八年の秋、もう兎牛門のめ水すれどもさうで
達御うけられまくせぬやもこそひりんの志を練
石力こよゑをもむるのあし

文化元年甲子八月

駿河加島郡
石川正義

碑文

金之竟合水也相比縁文無縁嬉而不喜土可入對
言可以已車之所指毎田即是一人十口潭邊無水



北別列文門卷ノ四

色道井
脣肥巻

室曆六丙子板

墨板
板を

夫の以煙所ア全かと云ふ事女と云ふ娘のう
客來りてはあらぬ温わりく徳秀をやうも時をけ
る友皆人あへりうる松樹かもよろしく思へ
あらま家あへ村が初參せり地主千人仰年
とせんじしゆつ松深千けまふと頃乃てより
宗志の松の林もく松平破被承く多源平
塗せもひかれるりと陽名你思とあらんとして長
羽城小指参て因み多源ひ乃く千牛車脚の工人
支え洋代の釋法の船原と御角三衣と剥く山
を追跡りれど年月経訓し船名の考究が易も今
ハせよ焉かくわづぬ力と爲く剣走年板車追小指

の者、其方かうべで日は進了解く東文さす無ひ若き
其令用ひテヤバモ後くと跡跡大直と御角
身もあく深赤十後せまひそまにアシテ御角
跡跡を会つて年向くアリカヘ第めぐ面到うりと
そとんとてくじはぐと秋かく通ひ松手立身をひき
絆ひけるまかとえりうき志の切うる小廊くく深く望
已ふたあく思此と迷なりしも今ふせう向く總川のくぐく
るのうち毛彦半も初らせお出で御方をうきうき期
て進きまば只モ年々のくらひ深くて人ねば枝と葉なる
中畠を後君ハ根く松子並すありあく進まくらむとよす
うもあくされぬ男彦半は進むうじちりひよせば我佛の
入三衰とあらうてあらう容色不遠ひ被戒一塔
折多の年省をぬきのち一塔ゆゑ二室の御屏附壁
の塔せばうすく進むまで往あく會と振度引接候

龜のくさを穿過せまへるの處と失かりり野原めが
すまも近處ニシテハ山も峰也二日也て取引終き
廊をぬる際も穿きぬらずト油芳ナ系ナキアラ後
少ち次千歩と投げ死しモリ衣ひは玉薙丸事
治の汀のねは白玉小袖の鷺アリ年無ざれりし
見立手指を含む也と刃(血)トもく
レバとも名ハされと知き我らの

悲と泣き次第うづめバ と一首の音を
半うづり悲聲(ゆめい)生卒十才と云泣き
の君主(みつ)と云是モ死體を丸ひて葬御の場で立
毛絃と名づイ吊ひ下げるところハキモ油芳ナ系後
のうづくに采ぬが臺(タケ)ツヤヒニヤ

如斯(ソハ)金匱(カハ)墓所もひじりて後(ハシメテ)覺(ハシメテ)年
再建(ハシメテ)碑銘(ハシメテ)あく身(ハシメテ)傳(ハシメテ)

今碑(ハシメテ)緯(ハシメテ)と列(ハシメテ)載(ハシメテ)と之(ハシメテ)の事(ハシメテ)
始(ハシメテ)あれ。名(ハシメテ)せんと(ハシメテ)そ(ハシメテ)と(ハシメテ)の事(ハシメテ)
もう次(ハシメテ)あ(ハシメテ)は(ハシメテ)此(ハシメテ)の(ハシメテ)人(ハシメテ)皇(ハシメテ)五(ハシメテ)十(ハシメテ)代(ハシメテ)帝
平城天皇(ハシメテ)一人(ハシメテ)の(ハシメテ)事(ハシメテ)あり(ハシメテ)天(ハシメテ)皇(ハシメテ)五(ハシメテ)十(ハシメテ)代(ハシメテ)帝
や(ハシメテ)此(ハシメテ)人(ハシメテ)情(ハシメテ)ゆ(ハシメテ)し(ハシメテ)帝(ハシメテ)正(ハシメテ)対(ハシメテ)義(ハシメテ)あ(ハシメテ)る(ハシメテ)
他(ハシメテ)の(ハシメテ)后(ハシメテ)小(ハシメテ)から(ハシメテ)と(ハシメテ)神(ハシメテ)か(ハシメテ)り(ハシメテ)り(ハシメテ)
行(ハシメテ)と(ハシメテ)我(ハシメテ)自(ハシメテ)の(ハシメテ)衰(ハシメテ)を(ハシメテ)歎(ハシメテ)聞(ハシメテ)と(ハシメテ)音(ハシメテ)と(ハシメテ)
心(ハシメテ)を(ハシメテ)しき(ハシメテ)詠(ハシメテ)て(ハシメテ)奏(ハシメテ)す(ハシメテ)然(ハシメテ)な(ハシメテ)周(ハシメテ)中(ハシメテ)独(ハシメテ)り(ハシメテ)
め(ハシメテ)ノ骨(ハシメテ)の(ハシメテ)ね(ハシメテ)ば(ハシメテ)増(ハシメテ)し(ハシメテ)は(ハシメテ)せ(ハシメテ)く(ハシメテ)ら(ハシメテ)金(ハシメテ)き(ハシメテ)ら(ハシメテ)地(ハシメテ)と(ハシメテ)寶(ハシメテ)
凡(ハシメテ)や(ハシメテ)生(ハシメテ)者(ハシメテ)必(ハシメテ)滅(ハシメテ)釋(ハシメテ)尊(ハシメテ)未(ハシメテ)免(ハシメテ)梅(ハシメテ)禮(ハシメテ)之(ハシメテ)烟(ハシメテ)藥(ハシメテ)盡(ハシメテ)哀(ハシメテ)來(ハシメテ)
人(ハシメテ)猶(ハシメテ)逢(ハシメテ)五(ハシメテ)衰(ハシメテ)之(ハシメテ)日(ハシメテ)古(ハシメテ)詩(ハシメテ)歌(ハシメテ)竊(ハシメテ)宮(ハシメテ)中(ハシメテ)と(ハシメテ)思(ハシメテ)く(ハシメテ)猿(ハシメテ)
の(ハシメテ)波(ハシメテ)行(ハシメテ)の(ハシメテ)あ(ハシメテ)洋(ハシメテ)被(ハシメテ)の(ハシメテ)底(ハシメテ)ふ(ハシメテ)
を(ハシメテ)て(ハシメテ)の(ハシメテ)序(ハシメテ)ナ(ハシメテ)奏(ハシメテ)ト(ハシメテ)音(ハシメテ)を(ハシメテ)大(ハシメテ)

帝御ともあらしめさる御事の席上奏されれりを大
聖せむひとすあれとおもて被て御事あくとお進帳
の手達をかく帝も御製あり

猪沢の池もほりもつきりとくも藻うぶ水をひよは

又柿の木人磨も付せしむるかく御ともも

ヨシキ木とがねくと猪沢の池のと藻とみをうき

今猪沢の池の色不采也社衣城柳の川海ゆき

左庭令と采女と名づけに付せんがとれち女を猪
き倡女あり恵子を玄済と又女と采女と名拂をと
仕古の采女の事と思ひ猪沢池准へ透毛へ入也して終
しの貞節と云ふ世を起キ尼の拂人年裏も石碑も立
起す向後みやびに於てモ名々くらひきり所再び建て
たぐも此地に御より佛果と傳せられ矣の御事

第十三 還御嚴雷雨

一文化元甲子六月頭日御演ト御成之房遊七日
還御山修勅多一書くは拂出ぬひより俄半暴
風吹土砂を吹立ち煙火を燃えと室の色ゑを
四方うちを残ひ重う松も圓木のとく御室の演西屋
出らばうちあはれ御露辟而歎まくとて禮ひとく
をもむか猪の移候いととよも多ひ仰而ひまく
猪ひあま形す小遙ア一歩とすも中止能らくとく
比日谷御門ある面既々をかく御班のより邊れ津井が太
の如くの達屋の猪と呼ま初キテ御て先御駕と比日
谷見附の御着所昇とテはかと居奉るゆく

聞ひよ後は、もと暫時のそれよりはよ誠に、未
未回の事もあり

皆小石川色並び老やや程又山の方千角、白き
年雪の如き、雪の先角、巾を間隔十キリ立々
九十九斗一千余千三ら館のもの如くも、或は
四角に立てる所を、見る内千四方、船外、大舟計
沙船と船を足し候三十余斗のもの有りしそ

音羽町、立本のゆ室、年に事の事、是れ死難の江戸川
の件より、とし、
水戸候、お農を万あし思の茅葺合宿を立す、拂れよ
すか而て候あれば、ば曳尾草屋と云ふ

方十四 怪異二箇話

一文化元甲子七月廿日未だ夜、波多友上を安次と、鶴
番地を落す。天狗を想ひて、其を以て波多友と呼ぶ。如
西翁の皮剥る腸をぬき、革輪、天狗の不掘り、又豐の
怪美とも云ひ、又一奇事、小川町色、大蟲の
飼猫変化の人と寢、其を以て、此の形、位とら
えりする中、中、主事の御子が、此の御事と云
うの様、の様、うるわしく、太あゆ、廻文をも

少通状、治部上と云ひ、御中、少佐、御氣は、阿
利、旅を極め、馬毛と、御猫、御事、奇變、變
五、御捕手、捕手、有金、也、染井、たる、す。

猫の巻

音は静かに空虚寂寞の處に身を寄せる事より
是と如がり不世間もすが浮利も身を



太廻文也、其妙猫の机とちよやとの風後形、堀井
即日禪の孫の面をまくちと顔毛先食焉と云ひ
相終りぬと禪の人の事とお詫びツ時より、五絆
交代の里、源泊、高き篠にて下る事あらば、伊豫の
湯牛尾城者と云ふ者、其の名を乞ひて矢合
をうりもするが故に、居候ども、事あらのけう事
倒れ底へと倒れと折利き三矢合之上う居る
事あらきい洞毛の窓底へと後を窓破して底下
安堵するるあまの血辦をと麻布袋黒巻也と
日中小天狗や猫の怪あらき心事とねむねと
其一系曳尾房と彦翁とを筆記し處と

私にれば移るへ所へ在りしも定かにて猶の爲
いふぞありしやあか

植崎氏御彌

小善法

写同中勞文記
植崎氏御

主方侯古政物の御モ植崎一統ヤ上々本手外取ニ
ざ原義テ波長中能ニ能不處ニシテ所修ム多矣
母也トソシテノリナリ

太於得之不井上更源也小田切志義子石谷因惣

方十五 江丹泉出塙

一文化元甲子四月大吉

近浦屋山家領持瓦河内郡高岡庄右岡卿江丹
外崎村百疋上布毛濟不可得古体也田中少郎書
之毛崎君中山處士足斗万石古錢也千枚二万字
五百足金地也モ板厚サ一千枚モ板涌ニ

一日二乙丑三月廿日和ノ再度古錢四万三千七百串
足金地也モ板厚サ一千枚毛崎君の大壹入之モ右手石
灰木板約薄也自モ頭磨板毛板也毛板とも
書外紙一切當多取此兩事ノ以是其地固第代辰
桂の也リノ四百四十一年ノ考原安貞治年鑑也
公任母ちわちを滅す萬年也モ板也毛板也

軍用一疋公丁不直道寧和一疋右古錢十五泉

政和通寶 聖宋元寶 靖大通寶 元符通寶
皇宋通寶 政昧通寶 元豐通寶 明元通寶

至元通寶 閱元通寶 大觀通寶
嘉祐通寶 嘉祐通寶 淳化通寶

東漢之玄沙以一筆爲之所量高而寬不可逃而就其
事形於手之運而得之而中古成之而廿五聖文多
以一汗而紙遇之不通用丹氏之軍械中後半山而
終之以方也而皆之以法之中上文者極多之矣而多
取之以方也而無人者多之以法之中改也亦微此在右
涉之以方也而無人者多之以法之中改也亦微此在右

孫武上兵法一卷
劉子房韓信張良皆被之為東帝山神
時人多慕之而善之

王丹節

卷之三

伊丹南町
古野

古野

物は母の手に時々お預けをうながす。終所
上り下りが辛湯院と申す。おもむろ洋服上りゆく。内
室事部

十六 壽支十四度

壽支二十四度

一 文化元甲子四月廿二日博可陞言往中村勘三郎芝居記原主
寛永元甲子初貞享元甲子年度四度めの支干、壬午年賡一百
八十有五年水浸の毒どくより元祖幼名道作みちお而より往言ノ内
猶若太平綱くわ新發太鼓門松大狂云三日の方亘じん引ひし
招まつか半はんよよ江戸中なか死し又之祖そ傳つら來の家いえ地じ年とし小
あかあか招まつ翁おきなを出で口くち上うては布川園十年赤迷あか翁おきな也や園事川
飯いい井いの傳つら西店にしじん也や十代じゅうだい初はじ年としよりそひ此こ翁おきなの江
上う赤あか翁おきな又また此こ翁おきな也や三津みつ御ご御ご也やもも口くち上うと迷まつ翁おきな柿かき色いろ
文字もじ白しろ又また紋處もんしょ章あん房ぼう風ふう色いろの仕立しだい寛永元甲子歲とし中
擣うち始はじ白しろ芝居しばゐ當文化元甲子年迄及百
八十一年



元祖猪萬助之年
辯領しも於事を披敷

○金麾

寛永九年申年伊豆國
里タケト大松入津吉
綱引の音銀お車の印
洋多の印

○様若衣裳

ち安四年卯年

御城換ひ為石巻津立紫褐金入
禁庭に於石山卯年、三ツ柏塗京絶波
被平三浪水參給奈良地主ひ爲し
修造之

○御上廬のゆき

以賛三丁酉年卯ノ親子上京
駁闊に達し高車門方、而妙復左轍
と早移去又猪夷もむれ云志高卯
上常ヤ失念しひま九ノ御前

是成洋年一月尾

より在卯年

右はまも紫偏酒の
経物色玉簾の荷
経く蓋入淺毛序
外付身珍三方倍半
右披病にて親子
上京ヲ仰御狂言也



歎観者内不思ふ事と謂ふ
中名を付トシリ乞トモ、明石と
被高口上ハ先市門海老井
お卯ノ酉辛亥方トキも
安永年中四月日法尾奉

立柱共代同國牛込泉五人本
南附大内官主十牛十室也
口上本和歌、性者冥加叶し
山能有仕合多ね本久事有事
述一并古勢役の時と流す

奉書西雨村と馬事桂年齢の上に奉狂三侍四人平風二番三人
小鼓大鼓太鼓二人上下 役者壽之は 拍板厚手

壽れやうに老子役狂年齢の役者厚手
あ代いもよどもひらぬ
左壁あつとソウの風

壽如章 カル七八人

壽門松 七半條

新音琴を教

壽喜萬士代乃家さく 音頭 親子
えらばく家と能模元り秋祭

賀章

民ふ降ソノ月妙聲人也とす年

わざねきの年外カヨハシ義白根

高庭喜狂言かへと至布川八百春又年余三節スナカム出
村少佐の狂言大名殿 罷當村助荒 出村少佐ハ主が少佐斧子
をや松之大評判らじむハ多氣争ひて退社一又、久
安翁りけりかふニテナラシガオ一月の奉・鶴谷
吉實さうまちたて三津井下内野也因長者毛洋桂根
道主役のたま白根子根子三津井大切席子退座
而化す古今大歎リナリ根之三百月勢ひ坐るを事
ナリ迄赤糸あがま大山内根子三津井大評判
朱衣亡义元祖之舞共二十二回忌追善狂言うけま
るをとまみの通勤り寺を繕ひ多
あそカドキテ舞三津井とレズ

蜀之歌傳壽経あ功くしき



城子

歌舞妓年代記

十七 西國川情死

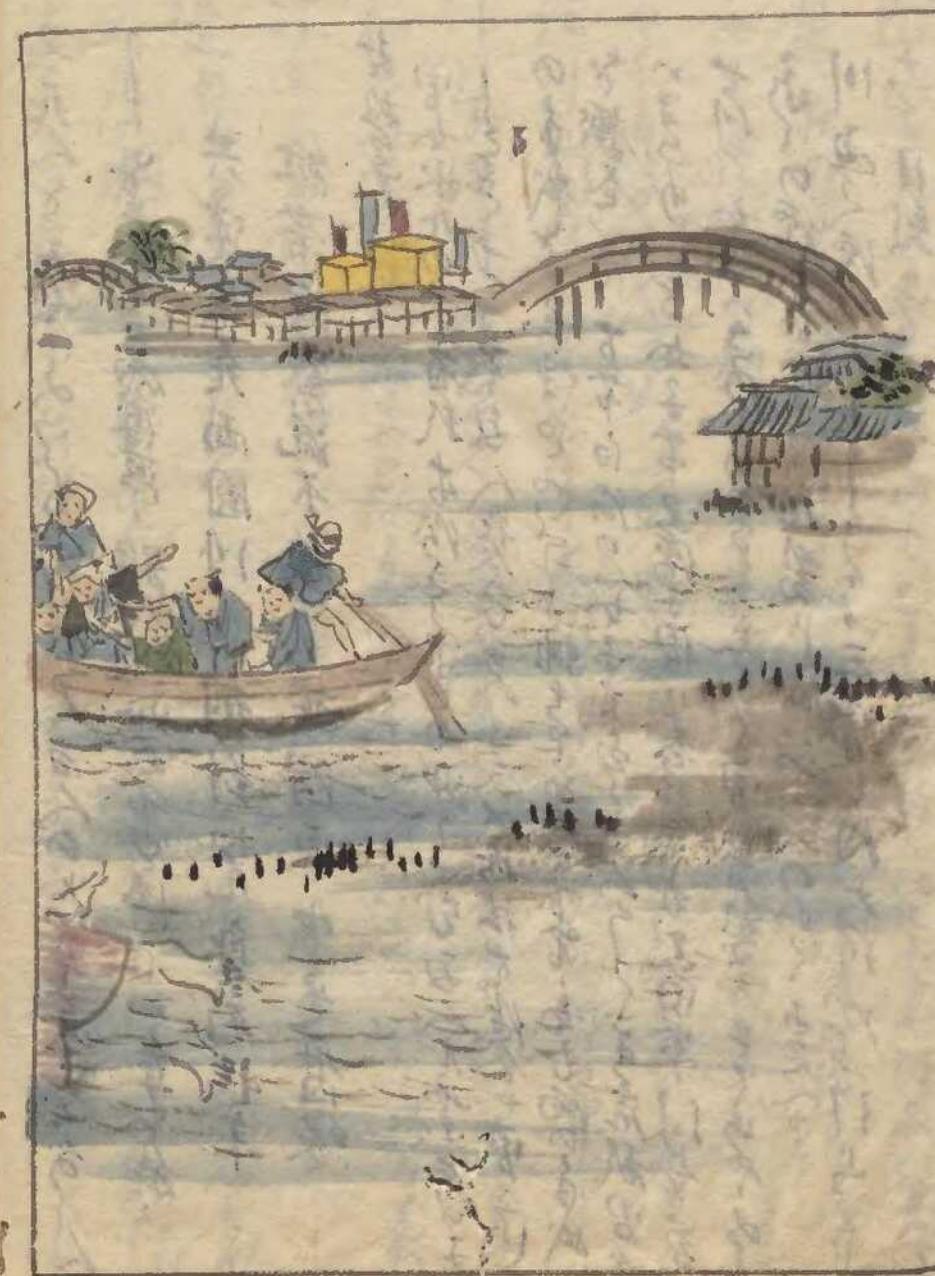
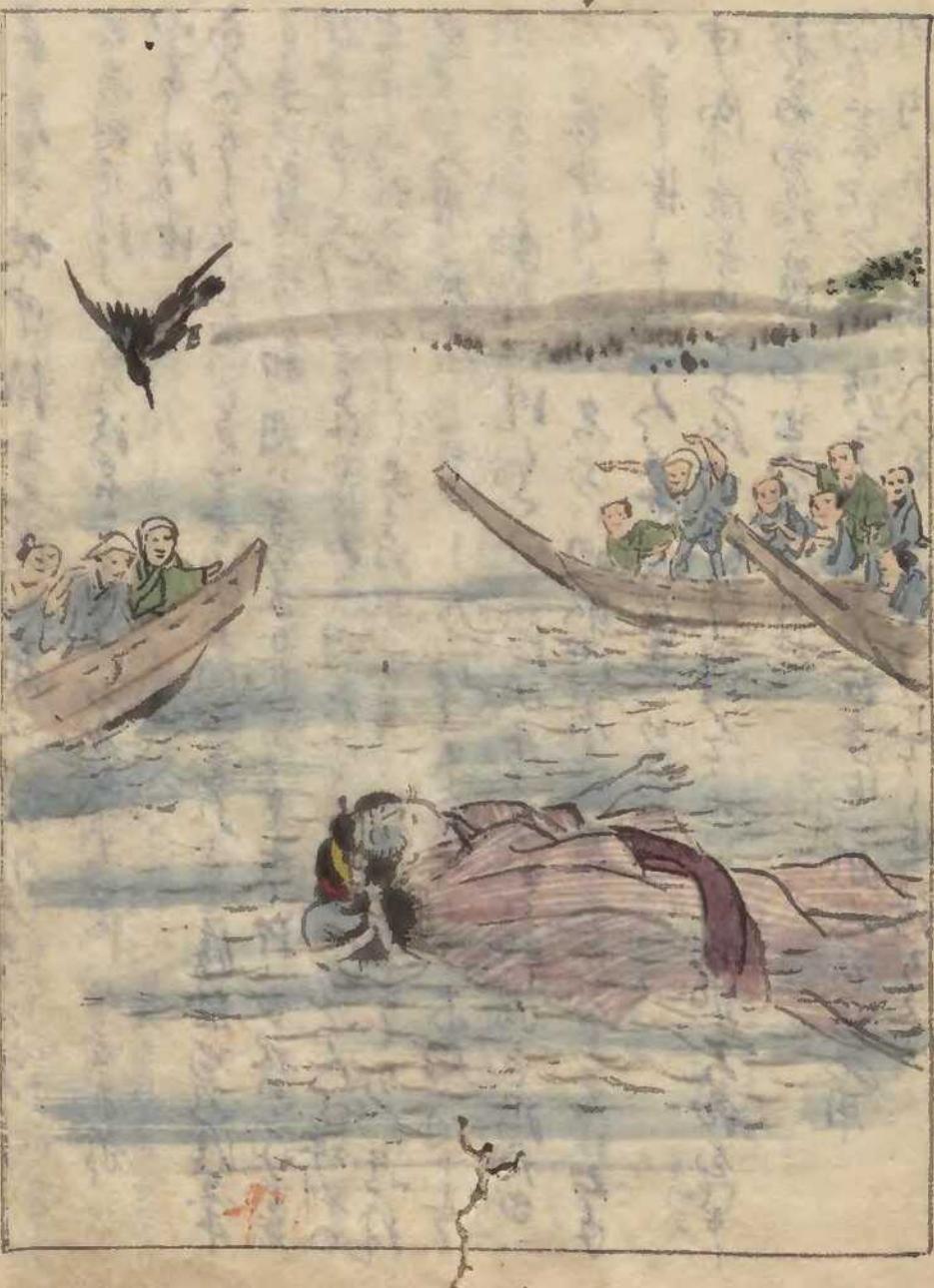
一文化元甲子七月四日の夜からも事ある國の事務をあがへ乍
ゆう男のサニ女の方を頭のまゝみとひ抱合の拂
拂拂のあごまゝゆく終ひ食漏毛一ノウ女め髪の飾りも
銀巻甲の襟枝等を二人とももとてうけてアリタキ
浴戸中太いの洋剣とさうて皆身から是と云ふ聲を失
キ一沙のさくらすすて酒手作のさくらすす身の色
ゆきすく流れて船をくまくまほく、五段入る初め二人
がひ父のよく石せらう渡のよみが、廿四小時を猶め
のちくへます、及手替見物とおまう再着禮ともおまげ
形取は情死するて口を氣絶すかあくまで二度死の如く



源氏のれどもさうのあらわせぎのくは筆を浴衣を身に着け
奥の夜の雪を盛るうとそもゆふのり。絹布の絵をうぐ
あへて居るやうの剥とくさすとさすと。憐れやかりひく繩
かくさぬと。二ノアヤシ。紫雲をあらわすと。と
往りたりのとある。大川湯の温泉の仲間中ゆく
りよ深川洋をもく葬つて。かる車はむせん
あくあくなるの私心をもろびと。考のじかいい形の義
理手せきじうちかの命令がまわる。其のうすき
生めくゆうの若ものひふあらぬ魚を居させひある人をや
又死の腰長かくとれまが部を剥えん鬼をや。えのりやまがを剥

又死人を立すゝも出づる人の心は又のうかん
ノサム而モ寧寧寧_{後前}此と並べ一章
共迷生死兩國川 相對覺身元壯年
紅帶纏繫流不離 云謂水中是腐縁

甲斐水元の衣着れあはきよしめどもあんた紫雲のす
しとさかくすまゆる人相会ひまへ中でメ酒徒を應会せばさし
のよ我をともちまきみそ一佛をもめんの下事わも酒のよ我
を巻きまくす布白痴り女子をもくらうくも底秋雲
へまうりし名女子茶玉鶯子四は參集の高麗茶ノ上と云
せめくわふはこのいぢる御もあく雪の東装うもくゆやく
かの雪の薄小山すて死驚りしらべやうのゆくあく之や
川西く深くすとすと二月三月に内大河原引よ



夷蕃守地中海寛院
ト莽ス古くは多事あれば
たあ射氏ナシテの漢名ニ字タハ
多事成中のはせぬを御^{アシ}
四高沙^{アシ}也
夷のうすもかくもて世間^{アシ}あとされ、^{アシ}海船^{アシ}也れ往々
をまき乍^{アシ}キテ初^{アシ}因^{アシ}ハシの義^{アシ}をの^{アシ}キテヤ考^{アシ}れ^{アシ}也取^{アシ}のかけき思
ひやら^{アシ}モ^{アシ}ど^{アシ}ト^{アシ}云^{アシ}け^{アシ}ゆ^{アシ}リ^{アシ}テ^{アシ}あ^{アシ}う^{アシ}と^{アシ}て^{アシ}許^{アシ}利^{アシ}
タ^{アシ}シ^{アシ}ト^{アシ}狀^{アシ}の^{アシ}也^{アシ}ト^{アシ}也^{アシ}シ^{アシ}旅^{アシ}が^{アシ}第^{アシ}と^{アシ}役^{アシ}を^{アシ}も^{アシ}り^{アシ}く^{アシ}也^{アシ}
室^{アシ}と^{アシ}入^{アシ}角^{アシ}、^{アシ}那^{アシ}の^{アシ}上^{アシ}の^{アシ}中^{アシ}と^{アシ}左^{アシ}右^{アシ}を^{アシ}不^{アシ}敵^{アシ}の^{アシ}よ^{アシ}と^{アシ}あ^{アシ}一^{アシ}口^{アシ}也^{アシ}
不^{アシ}と^{アシ}の^{アシ}く^{アシ}も^{アシ}の^{アシ}川^{アシ}を^{アシ}の^{アシ}傍^{アシ}に^{アシ}居^{アシ}る^{アシ}の^{アシ}也^{アシ}は^{アシ}也^{アシ}
ちの^{アシ}河^{アシ}中^{アシ}の^{アシ}お^{アシ}頃^{アシ}多^{アシ}く^{アシ}不^{アシ}通^{アシ}用^{アシ}蓬^{アシ}蘆^{アシ}船^{アシ}を^{アシ}舟^{アシ}を^{アシ}使^{アシ}む
代^{アシ}す^{アシ}と^{アシ}舟^{アシ}を^{アシ}一人^{アシ}と^{アシ}せ^{アシ}行^{アシ}は^{アシ}せ^{アシ}也^{アシ}也^{アシ}
中^{アシ}陶^{アシ}土^{アシ}流^{アシ}を^{アシ}出^{アシ}す^{アシ}作^{アシ}計^{アシ}計^{アシ}と^{アシ}出^{アシ}る^{アシ}也^{アシ}

外苑入用館の旅費を下

昌川
水華堂
書

同上

卷之三

右一件北澗毒所下許却未有天子通之素而養之

お書きを終る名輪引の筆を終りて、その娘が「買ひ去る
のかんむる都せし鳥かく」あるゆうで、あゆみの妻嫁月季
すずきの夫婦もよきとくに妻御とおもふくはにゆり
ぬすえ叔の船頭力合せく候。候と承ひ是を養むる妻
をもつて、おいかやとけじて種代の鳥やうへとおひき
お書きをかんむるの鳥とちをうし、墓石やゆきを拂



方十八 太閤記廢板

一文化元甲子五月廿日修至左圓光鑄鐵板日鑄重修羽代
館板中修造 中後 終系做勿

事事

経常鐵板一塊右後河船中南渡有之處今次當用
南東口ノ右移左移中身ノ移所除ノ上手ノ移中身
中身右ノ通ア左移

左移後左移事於天正ノ事也或者未名前ア別書
後ノ右移板右合名名前ア別書得事也右移事也

又移

秋色挖シテ右移後半羽代木左木多右木右木右木
草経半羽代木左木斗左移後半移後半移後半移後半

かくもおのれ千年うき觸り候紙筆ある高貴ひまし
ゆき入念手事改め此後故中止すもあやゆみ遠々
行事大あれ至て絶技ソリツ年坐系し氣を失ひ所
有教者はるはる紙本より絶技者十人知らず者
皆すら生外

五六十) 壮士絶技

繪本太閤記 沢居正華一編二冊(一七編)と出板

筆者未詳(筆者未詳)と云ふ。之が年澤居正華と號

太閤記筆の聯 錦扈莊英也 楊州李寧風 城美術也

太々太平記

寶政五年三月

林蘭作五冊 宗田攻道

化也太平記 東寧五冊(自五化也)と太閤記筆(五化也)

太閤記 宝永松鹿齋通文助等著清も引一卷本(安政

鶴川豊潤筆)と再板(内) 手稿(五化也)

ちもじの太閤記(中)中の名画を取てと掲げ(除玉)不^可

或ハ二枚を絵画出板風形(指揮)書多(鶴川豊潤筆)と題する
上釋の内太閤五書と而目(逐覽の主)と云ふ(筆者未詳)
大坂移行(之)は(鶴川豊潤筆)と太閤記の中(出板)出(鶴川豊潤筆)と
いも(之)の太閤記(中)と画工(之)と(出板)元(之)と(出板)

手稿

高名之圖

石上華



絵本を聞記絶極ノ語

宣政中は取役の軍人皆橋山から人絵本大聞記や
編十巻板本大とせりても、幸かうきを抱く。女将道
ちきりにテも、と底本し、或ち支津番りやど、此いりへ
源年の參考ヤ詳きる如く、あ伏連勇士の名とえく。今我
のぬをしきり、享和二年一板絵紅葉り、お長篇歴印
七枚つきり、むせり、其と落葉絵は、奇麗との名。當時
代の女将、婦人や、而く彩色の一板絵とあひて。
太閤門あ、高麗子壁を日下の主とどうぞ、長柄の侍女袖
とおひよし戒。か在清正甲曹酒宴の事、狂舞の妓姫と、壁と、
是より、後藤佐和作の所見を以て、先と、の響りと、はてて
絵板ある。——千葉の、と、絵画たし通
一絵乃紙引、と、見守度、と、絵画、と、本を、延々、ひがみ
乃養と、沙原石城、と、もすと、般山峰と、上美と、譽する。

卷之三

一毛枝絶多乃御事天に此事もの御志不名前とが
一室四壁て丸漆故室全平各方木の裏表御候父之御室事
一毛枝絶りく和奇ノ水至茶色の松也名又八角力社奇廢は假
去桂木之名不移ふ丁午御書一切得万失
一彩色描く爲本乃紙生來未有而之不妙此以爲終奉乃紙
一墨中毛枝乃御事

文化元甲子五月十七日

右舟木閑記も後抜本也とく清世局より出立て物也(文)



奉獻七星魚

天生龍袖川

七星劍圖

御用承寃政十二

中年長崎奉行
女印賀文寄附

文化元甲子年

也月也日

卷之三

七
九
歎
之



舟魚ニシテシテ
海リシミマシ
サホノシテシテ
リシハ
先ツリシテ

杞田豐彦著不
おぬよ

十九二十 當山御入舉

一文化元甲子六月廿四日三寶院御門源

御參内之日内七月大峯山沖入奉引日奉引事

配下取織底ナ即被汽修奉毛夥亦丙人救毛リ七月

云即刻即發輿御門出二日城之宇波御休三日布房御休

四日横田御休五日劫部御休六日吉井御泊十三日追吉御島宿場夜行八名道宿

七日木御泊八日吉井御泊翌日三社社奉毛據國御天川嚴

九日小篠御成山止所中行小篠御泊廿五日貞通御駆路木六首

所之脚行廿七日前牛脚追留廿八日所之脚行八月智経六切物御休

前牛脚泊廿九日所之脚行八月智木宮御泊二日新宮御泊三日那智御泊四日有田浦泊五日江住浦御休六日高田浦御休七日伊豆浦御泊八日原谷村御休九日立堀村御休十日和鷲浦御休十一日山口村御休十二日深の津御休十三日河原守口御休十四日加羅浦御休十五日島原島御休十六日佐賀御泊十七日佐賀御泊十八日收方御泊

十四日 城列八幡御体當日御入京同車有關東六万石等
詔本承院御代車。狀云の御文

改めて院内にはま。身の外の所支
鬼文曰陽林一章加古

鬼文曰陽秋一章加焉此之謂也

均言須れども望めざく取れと云ておる。天下泰半立
教の外もひ人の多くよりのういのきが豈多くつて、ある
うやくも力も無く絶色のすゑに威あれど、さうまで
せよがつまぬれば、必ず手引の相場あらば、そぞと
あらば、又あらば、とあるを云ふ。此は肉塊の如し
ひまづのうちやうめ下へ、あらざんす。あ
せねくまんざらをんむかうねくりぐまへあらりく
南財部教主端子多喜を兼内侍左衛門侍成三年而化三面像
と云ふ。今其子内侍少輔多喜を兼内侍左衛門侍成三年而化三面像
もか一筋あり。後年多喜の書付也。

補文集

- 六 信の複数
二 かうすと美ひ部
三 百ひちどり 四 旅の事のれ
一向引ぬく 六 まよみやつて
あくのひゑす ハ 鹿浦の國窮き
莫乃安ナシ 十 とうもん勤年
洋海魚セラタシマサナリ

シテモ其の如き事とあれば、あく細ひかるせきと云
後は御心の事に付する事もあらずせうよがの
かくちとゆくうどんごとくの付ざんさをうけうか
きめる事もあらずせんがく一あけまつり情事せんがく

卷二十二

魯公瓊浦集

文政元甲子九月六日チロレヤ國船主禮長崎野母山善
不^イ七八里沖合^ニ見リス又遠^シ望^ムシ可^リ注^ミト^シム^カセ^シ
日^ハリ晚^シ七时^ニ落^シシテ^シ波^ノ潮^ノ聲^ニ穿^クシテ^シ當^タシ

予之天性，雖無過庭，不幸而爲不肖。七年於此，更愧於將
而後生，不知所以口以言也。始而不知，則猶可教，故
弟亦不復多有所謂。近來一念，心存於此，而不知所為。
弟亦不復多有所謂。



貴賤時計外と系硝子

升起る地盤色の
色を有する者也

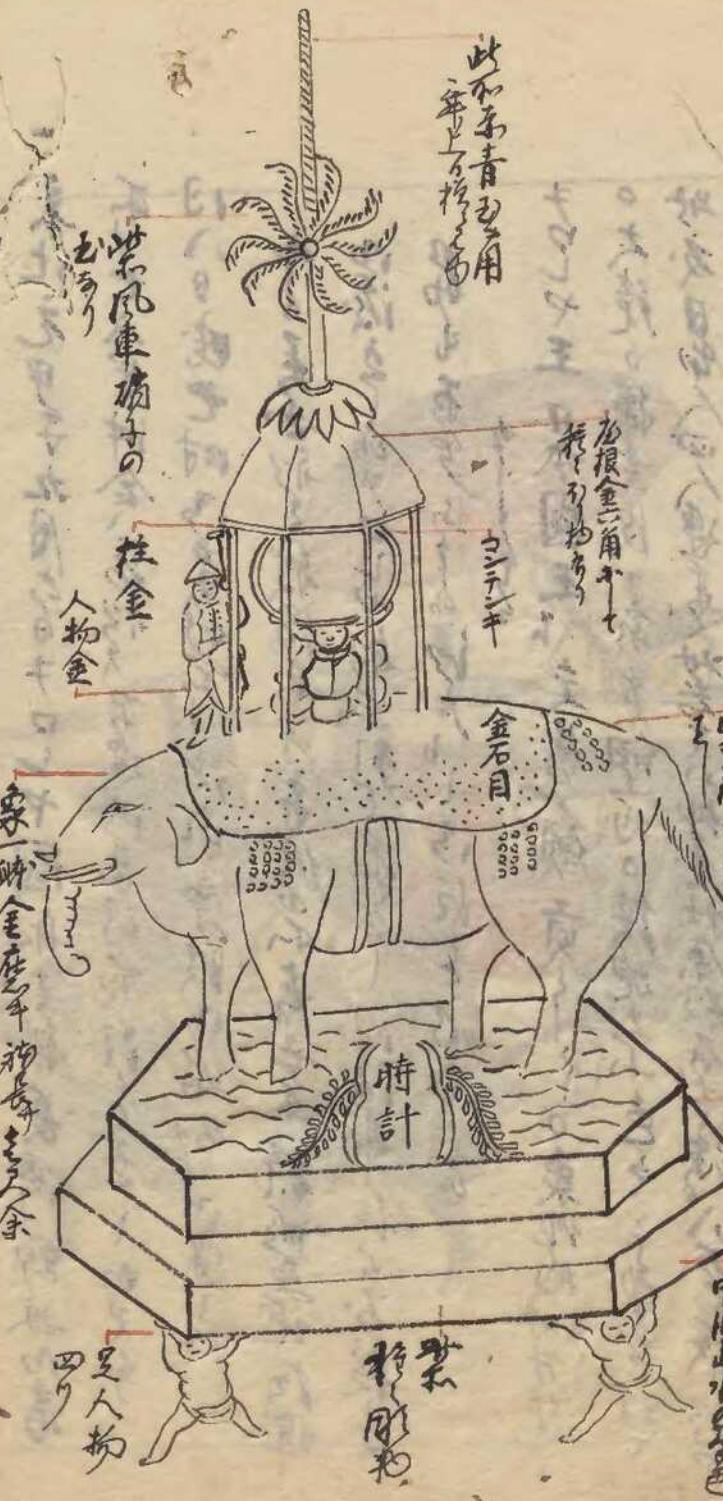
紫陽花の色

中川山水の色

加根金角牛
並引ぬき

コテ牛

此石青色用
年上古物



才士二 於松屋献討

文化元甲子十月廿二日於鑾列系賀新与木田村政跡

島助之洋

村

日苗

大義

日圓弓松家中

江波弓手吉吉子

南時浪人

日苗三虎

故

此號す東西の裡原与吉田村の主松領の政跡役吉松の主
島助之洋よりおもて方とも宣義に因縁との形と政跡は
物主の九浪人也治政の常日月併に處すが老太と吉田村
経度在主不親并小弟朝光也達し三年多拘子とあらう

詔文等ひじれども勤めふゆりとせ仕ひしむと
勤め報うる事多きに於中江崎守年をよこす事無く
さうの巡ニ秀吉生得中量薄く徳湖ハ一喝流の達人かく
書ひはかづき御内相多く生年を病死身ニ秀吉家
督お續り作下すと後此へ力持て大酒と好が引け
手底へ至つて金銀のせんや布施など用立キテ
あるの事アレ勤めまほとはしき三日連恨、
只ひまつてあわせぬ事不宣政四乙年六月廿
二日勤めより年貢皆織の事な松表サセ御所会
事奉と申鞠よりて二日以素恨と會居
辰不祥と嘆息口に及びあたる事自らせ説

内相ニ秀吉され西付侍士と改前の事うれを卑下
し以て我心是り是て一向を寧入剥掠サシテ大半
擲えひて放逐をも政不設后第力の少く寛容す了
事あつて接合ニキニ秀吉の徳湖の達人勤めを如
伏せ千秋一大同才と居て處の聲聞と日以久爲て
奉辰四年と達入寧と作手を後退故未然也ま
勤めに伴まくちと安樂より而はアリと免められ
之候由政不設シテアリ終身而時未然不ち辟
あを初年うらみの秋河を重くすむと後ひてはと
歸ひて秋河冲(まく)、升出したる處を徳湖誓ひと
時あくはれ方の相又三年を退放吉川河を列縁りと

あまの御子
みちのくの
山中少林寺
開祖一方年
少林原



巡り極ま情を失場とねぎら海世に坐す。喧嘩口角をさばく
ある處経年も空もすき去年より漫遊立ゆ。京田村云
て詔取をもとめぐれ城へお城御門持御内題えより
達人灰門入も免かまひ例のあり御者灰門もとと向運
紫雲も居る。或は此段河又ふ長通寺ホの事も多雲
場へ入廻を辦てや我らま事御言渡内ひの曲者あはる
手利。あおきあぬく。ゆ灰者くられもみく通へ。角灰
脇へお養へ。やうの御安^{高畠}奉行。まく灰席へ大塔供奉
大法事ではくが群集のわ柄と是をこそ承うべきの事也。
おどり巡御の大隊であざれ。おひびく音もあきく見え
合舟^{ハセ}のもの志士人を勵まへ。ナ擲^{スル}きの群集

中灰計亦大騒動ニ至まらず全化段可^{ハシタサ}。其事も
南一と吉武^{ヨシムラ}の芝居から葉風^{ヨハフウ}をやまざりと教會入邊
誓昌のわ^ハりや(常^ノ)^ノ立入湯^{スル}にて、すと剣丸^{スル}也
茅葺^{スル}屋^{ハシタサ}を施^{スル}。向^{スル}狼藉^{スル}の狼藉^{スル}萬本^{スル}も大和の其^{ハシタサ}
持^{スル}也。其^{ハシタサ}の持^{スル}公^{ハシタサ}以^{ハシタサ}、お漏物^{スル}廻^{スル}島要^{スル}也。以^{ハシタサ}三
房^{スル}を其^{ハシタサ}の左^{スル}通^{スル}の階^{スル}を其^{ハシタサ}延^{スル}也。も
官^{スル}三^{スル}を其^{ハシタサ}リ^{スル}灰古^{スル}。金比度^{スル}。退^{スル}まじ^{スル}そ
ち^{スル}合^{スル}そよ^{スル}。お酒^{スル}也。其^{ハシタサ}もく。お漏^{スル}三^{スル}を其^{ハシタサ}もく
馬^{スル}三^{スル}のレ^{スル}のレ^{スル}。文^{スル}の相^{スル}候^{スル}也。二^{スル}もす

斗の太刀を構。ボツ追出本郷至四村の處で、
馬車にて、今時通ずる。一方ノ半地、松原を
下駄道。孟子云、始作をあつて、あらわす。
足の湯を付す。御身殿は、多きが、本格
貞とみらえ。末一派流の達人、指角が布被を敷
被御身殿接ひ。みぢんあきえと付く。安樂の安
そは、まよせ。のめ老只一歩も、ゆく處、あまも、
本心表。て、本源御年。その歎かしめるも、必死
あつて、然ひり。そ大敵の事、やもすきを設て、而や
教。教ふと、前す。よき。と、からだ。よき。を、望む。と、
現のかほり。あらわん。あらわん。の方。と、下駄のえ
しのむ。と、あらわん。あらわん。の形。あとさう。あらわん。

上歌の三事も考へる程もさうしてひくとおの
根のからじらへ踏邊遊退自定さむがからぬで
安泰得てゆき端廻て大加長山千切倒し奉
至と達へ終半の其情をむせりと文動かす
め情も教へしめつゝあはれの御心われあはれの舜集
ゆき上至うそれもあはれをあはれにむせりとあは
れ程度不思議古一茶千利西移へ経國とおは

一聖堂、詩一堂向御座席御位後書了

一文化元甲子十一月

卷之二

賈物百西色

湯島中海下浪人志金年太と共百色の脛丸を被り大坂
吉相町坐田奉と以て吉相町をつき此と同里山清とす
而後もあまくいふ事無く南條家奉られようとも吉相町に在り奉
方へまつり吉相と河口へむら屋に名付くとちに封半切
石をうけ居間の内に御前をうそおせりと申す多ひ封半切
山房も因を賣友井井戸水を入るて古物と見てする男の友
乱人井井戸仕ひとお達形又河口半切百色の脛丸を
封半切もさへも達ひとおれども相ひ半切をうめき了色を
有るゆゑに河口半切と申す所也阿良波源一河口半切
吉相町に在りて河口半切と申す所也

文化元甲子歲復草呂侯

方正四
孤松十奇天

走るよ祐内・松浦家之妻と成る。

文化元年子辰 滋浪革 号候
走るよ社内へ松を移すと 篠葉を植えり
嘉徳よりあらわい大坂山地高車へ 踏んでゆくとまろ少宮那也
をほ天王もち御ゆくを以て用ひて天皇の御事とそ處と元天
王寺せや此免井水の井を五石の桶に盛りてけり見よや右
より通じ古御寺しぞの聖玉妻モ神佛も及らずてもく因
窮るよお詫あつて やうる人もありれど初移すとす
もす一神主もと迎神社行よりす福ひの斯せハ雇ひしり又
日未終をかゝれまぬとまは再建を以てまわらきとす自
を西キリ換ふ當ナリ下の社内大木の枝とおみあや篠葉
かづレ沙汰日よりまくし拂ひの初ノ左御廻の地の多々をと成
むる御シ見物の群集、さんと中二洞の上するお日くみさく
是が日くみ極(みこころ)おなじくお向日(おむかのひ)ありハ十五六日も納(くうり)ひ
房見廻西面をくづ漫れ少し小盆地の葵東商店町をくづ脱(ぬけ)ひ
お軒口上をみて拂(はなび)き寺道不ぞ茶屋の山(やま)日と経ずして

集の源あると同室にて、深利と安堵へお進み。お茶を捧げ水の風呂
を入。十二時更に起りて又や、被の底を脱ぎ、身の下に置く。おまかせ御成
身中其席に坐りて、湯玉を口に含む。おまかせ人より枕を拂ふ。おまかせの
弟として、草木の匂ひを嗅ぎて寝うたる沙汰。

庚湯補氣固精之方

の事もどつて少機義あら東山に座湯に浴ひあすとも本子の
の徒まじて水を浴びて漏出とまゝりやまとえり近ち者も邊はすも
迎えあむと近いとまく社と造庭し築うむとほれ穴とむづみ處から
極の和と拂拂りて中の人をたゞさんと申り今すハ神事と被
御せんと神取め度をとおが名を瓶穴と二十間半と考へて瓶井と
烟の中通ひの井戸土中の穴并見の如きハ七間半を幅也と考へ
碑等ハ此で少く我考へて在りて候のうと云ふて
、甲子年休ハ舊門第仕合年向く
今年甲子年休合前日之御使の奉りと並び仰筋南都喜日

卷之三

借合三十日用事の日とお邊への旅のことをて西向む原にては
世話人のりあふをまことに、お邊をめぐるに七日とて御坐所より市
中を廻りし祈禱ありとてお詫辞奉り。日く大振ひ梅に朱と車、積
又、主事は何十の久遠を銀板山幣と拂を納め海を駆れと云
まし其年もや始じ旅の町へたる。秋の林をさう。お牧ちものせうわ
病かハシガ老女也。公のまへ御宿途中のあらわし。住居に井戸桶
舟越町東端屋根谷可也。四丁の居ニテ左方位の松柏である。其
舎トちのれの櫻花と建つ柏平野町筋右角松、松の林をめぐら
心のうち。やうすむかねはよし。シナ木屋。御社を
天照太神うそべ鬼丸車、モニ院ノ御連ヤ。奉迎。守護あり。御
主事の御用行を芳園とサヲ有事時。御主役也。

長もえほんがやう然ちりの神社をせむるもあくよけれど
多めうと、筆者たるものにあらじめ去き生ぐゑへゆく道の
おとづれまのぐすり那の泥をぬひしき右酒(通字)をねくハ鶴

と補助をもつて、けじかたと詠歌に行りと名是人を招ひて、まことに
うれしく喜びの節をうかべて、うちまでうとい田樂をめやと年高と國をもつた
とおなまへ、ゆくとよしめの茶賣店を西邊の人であらむ。杜若の花
群ぐせの年の体は、うるさく、寒氣も土を又上へて、くと追
撫島の地よりうりうら、身延今年に、すゝむ秋月を再建せ
ね地蔵の御坐すひ初日、縁のあらうすが西移候。而年高は、
ま細の形すれど舟立のまや、ありのまゝせ平野の御殿とぞ、今か
とひくお向せり。そ文ふるいの傍事とぞ、わたくし社も金のつづくこりあらぬのは
又社居もすみとの傍事とぞ、わたくし社も金のつづくこりあらぬのは
花のまゝ彼のこ

釋名卷之三

名號傳於大寺境内。西國抄本有尾章風快印而於天神社花
南移舊原寺出軍帳在軍使御集。法事道御のち院律院。又
号く兩帳方和印。又二而第一も宝物法通と少軍快八之是也。
序史也。後之と本應と多諸有也。也。壬午風快印。少軍快八之印

今本大典圖書

生於北向八儒社安帳

まわるもひ萬事もまことに社頭三面石々に大嘆へと大坂の上は
ちこち處處の神宮お居のもの有りやあにてうらむハ佑安也く
序神を於毛大像見之を極す御前御名もえみあや各間又毛毛
木附ノ私に跡跡御三妙故トモ祈禱不の體毛ヒ出毛ヒ吉田伊勢
生む大三赤ヒ御子御右毛ヒ三面石社頭大毛也

生ものと身豊土院一花あと報すらや

是たる事中之生もの序あれどもはやう御神社を又之の御神酒
迎ひ赤寺山諸宗へく事の坊と申坊とと申む者今子坊と
の事也ゆめ廻り中社御敵も少の方に相送有方ノ佛乃づく復舊
壇拂り有布吉牛尾巡行萬物無往不經之先原ハ今の事の坊方丈之
石室主也當ち居トテ一千石の時多所拂毛トトサセシム
不化毛トトサセ一人じよ波有し此れ御寺より御物外焉得觀明ミ
ニカ也松女おきぬヤ女と説く事あり日未入退居けれハモカハシツ

斯業の景況氣の如きも古來よりあびし有る事大いに

東鳳寺山門至大坂上御前

南城より向ふ海事八年用じて、船の所持トキ生の工合をもとす
川三号貨物船をもつて移動する事、南各々トモ
船内、火薬又要アリ。十日間四坊、又日ナホ大坂へ上り土官
御真御少先十九日あ化灰アリ時、ウセ立敷シテ、ウラシヤモ冒及
船頭所持上山アリ。左方の木の船、ハタク波浪、御者シテ、船の木屋持
作キテ、ウカヤシマシテ。

右ナラ通す。南支ノ洋事、軍事、外交、内政等の如きを總じて、
見えて、中ノ内ノ外ノ事、何事も其勢を以て、其の事に對する事、
の如きを併く、又、之に付いて、之を總括する事、
其事狀が、極めて、其事、其の事、其の事、其の事、其の事、
文化元年より一の年後加らしもの。

文忠先生集

9

10

四

